

創世記2:24

コリントの信徒への手紙一6:18~20

「わたしたちは聖霊の宮」(第七戒)

(ハイデルベルク信仰問答 十戒について 問108~109)

※問答は「日々の祈り」をご覧ください。

【招詞】詩編34:6~9

【讚美歌】24「たたえよ、主の民」

【詩編交読】詩編51編

【赦しの宣言】イザヤ書55:7「主に立ち帰るならば、主は憐れんでくださる。

わたしたちの神に立ち帰るならば／豊かに赦してくださる。」

【讚美歌】210「来る朝ごとに」

【祈祷】

【聖書】創世記2:24

コリントの信徒への手紙一6:18~20

【説教】「わたしたちは聖霊の宮」

<姦淫>

今日は、十戒の中の「第七戒 姦淫してはならない」という戒めについて、御言葉に耳を傾けます。

姦淫。普段は触れることのない言葉かも知れませんが、姦淫とは、根本的には、結婚している夫婦が、他の男や女と関係を持つこと。不倫をすることです。

わたしたちの今の時代では、不倫は、比較的よく聞く言葉で、世間ではありふれた罪のように思われています。また、今は結婚前に男女が関係を持つことについても、もはや当たり前のようになっています。聖書の教えは、もう古臭い、時代遅れの教えなのでしょうか。

…旧約聖書においては、姦淫というのは、非常に重い罪でした。レビ記という書物には、姦淫の罪を犯した者は、死刑になる、と書かれています。

また、姦淫の罪が重いということは、十戒の順番を見ても明らかです。姦淫の罪は、殺人の罪の次に置かれている、死に値する罪であり、次の第八戒、盗んではならない、という戒めよりも前に置かれるほどの戒めなのです。

これほど聖書が、結婚ということを重んじ、また姦淫の罪を深刻に見つめてきたことについて、わたしたちは今の時代こそ、このことの意味を教えられるべきなのかも知れません。

<結婚>

さて、聖書における姦淫の罪の戒めについて知るためには、まず、聖書における結婚がどのようなものであるかを知らなければなりません。

実は先週、熊本で九州連合長老会の信徒修養会が行われ、「式文」について学ぶ機会がありました。その中で、教会の「諸式」、つまり結婚式とか、お葬式とか、教会で執り行われる、人生の節目の誓約や礼拝についてのことも教えていただきました。

そこで講師の先生が結婚のことについて話しておられたのですが、こう言うておられました。結婚は、戸籍を入れることじゃない。神さまの前で誓約をすることが結婚なのだと。

最近、戸籍を入れたら「結婚しました」と報告して、式を挙げない人たちもいるようです。しかし、教会においては、戸籍を入れただけでは、結婚したことにはならない、と言うのです。結婚とは、神さまの前で、男と女が、共に神に従い、互いに助け合い、死ぬまで節操を守ることを、誓うことなのです。

結婚は、神さまが定められた秩序です。今日読まれた創世記2章には、男と女が創造され、その二人が結ばれる物語が語られています。

今日は24節だけ読みましたが、18節にはこうあります。「主なる神は言われた。『人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう。』」

最初は、神にかたどって造られた、一人の人間がありました。神にかたどって造られた、というのは、神さまに応答して生きる、神さまと共に生きる存在である、ということです。

神さまが、この一人の人に、「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう」と言われました。「彼に合う助ける者」というのは、ただ彼を補助する者とか、サポートするための者、という意味ではありません。これは、「互いに向かい合って生きる者」という意味の言葉で、対等に、面と向かって共に生きるパートナー、ということです。

一人の人間は、最初に創造された時から、神さまとの交わりに生きるものとして造られました。そしてさらに神さまは、人に、共に交わりをもって、面と向かい合って生きるパートナーを造られた。それが、女でした。

そして神さまは、24節にあるように、「こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる」と言われたのです。

これが、神さまが備えてくださった結婚の御心です。

結婚とは、両親を離れて独立した、一人の男と一人の女が、向かい合って、心も体もまさに一体となって、共に生きることです。ここに神さまは、自立した人と人とが、共に生きるための、夫婦という共同体をお造りになったのです。

結婚とは、神さまの御前で、神さまの御心によって与えられるものです。ですから、結婚は神さまに祝福されたものであり、神さまのご支配のもとにあるものです。

その中で、男と女が、神さまと、お互いへの誠実を尽くして、真実な愛の交わりを築いていきます。これが、聖書が語る結婚、教会でなされる結婚式の意味なのです。

<罪の本質>

さて、そうであるならば。結婚の関係における、夫、または妻を裏切ること、あるいは、裏切らせることの、深刻な罪が見えてきます。

それは、神さまによって結ばれた関係を、破壊するということです。神さまに祝福された関係を破壊する。これが、姦淫の根本的な罪なのです。

ここにはまず、神さまに対する罪があります。

さらに姦淫は、心も体も委ね合い、分かち合い、一体となった相手を裏切り、人格を否定し、尊厳を奪うことです。それはまさに、殺すことに等しい罪なのです。

ある牧師は、第六戒の「殺してはならない」という戒めを、男女に置き換えたものが、第七戒の「姦淫してはならない」という戒めなのだ、と語りました。男女間における、性的な、自己中心的な欲望は、関係を壊し、相手を激しく傷つけ、損ない、殺すものなのです。

ですから、ハイデルベルク信仰問答は、第七戒のところで、こう教えています。

問 108 第七戒で、神は何を求めていますか。

答 すべてみだらなことは神に呪われるということ。それゆえ、わたしたちはそれを心から憎み、神聖な結婚生活においてもそれ以外の場合においても、純潔で慎み深く生きるべきである、ということです。

ハイデルベルク信仰問答は、「神聖な結婚生活」と語っています。神聖とは、神さまの聖さに与ること、つまり、神さまのものとされている結婚生活、ということです。それは、ただ自分たちが好きで一緒になったというのではなく、神さまの御心によって、神さまに祝福された、神さまのご支配にある結婚生活ということです。

だからこそ、「純潔で慎み深く生きるべきである」と教えているのです。

そしてそれは、実際の誤った男女の関係を持たなければよい、ということではありません。新約聖書のマタイによる福音書（5：27～28）では、イエスさまがこう語られたところがあります。「あなたがたも聞いているとおり、『姦淫するな』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。みだらな思いで他人の妻を見る者はだれでも、既に心の中でその女を犯したのである。」

イエスさまは、心の中で、みだらな思いで他人の妻を見るだけでも、それは姦淫の罪を犯したのと同じことだ、と仰います。

先週、殺してはならない、との戒めが、人を実際に殺さなければよいというものではなくて、その心の中の妬み、憎しみ、怒りを抱くことも、殺人の根っこであるとして、戒められていることを教えられました。

姦淫もまた、同じです。それは、姦淫を実際にしなければよい、というものではなくて、心の中であっても、妻や夫を裏切るなら、あるいは誰かから妻や夫を奪おうと思うなら、それは、もう誰かの尊厳を傷つけているのであり、罪を犯しているのです。

さらには、姦淫の罪が、夫婦の関係を破壊することであるというならば。もし、夫婦の間で、どちらかが相手と向かい合うことをやめようとするとき、あるいは、関係を疎んじるとき、そこには、姦淫の罪があるのだと言えるでしょう。

結婚生活は、主なる神さまのもとにあります。神さまこそが、二人の主なのです。

だからこそ、この第七戒は、古いお堅いガチガチの倫理道徳なのではなくて。神さまの祝福のもとで、神さまに与えられた相手と、より深い、より祝福された共同体を築いていくための「道しるべ」として与えられているのです。

またこれは、結婚していない者にとっても、やがて来る祝福の日に備えて、大切に守るべきことです。また、中には独身に召されている者もいるかも知れません。聖書は、そのような歩みも、神さまに与えられた、祝福されたものとしていますから、その場合にもやはり、罪を犯さず、歩みを清く保つために、大切にすべき「道しるべ」なのです。

<キリストの十字架のもとで>

しかし、わたしたちは、結婚している人も、していない人も、完全な結婚生活などはない、という現実を。また、心においても罪を犯さないでいることの困難さを、よく知っているのではないのでしょうか。

一人一人は、やはりどうしようもない罪に捕らわれており、あらゆる弱さや欠けを持ったままです。その弱さや欠けは、まさに一番近い人にこそ、露わにされるし、また一番近い人をこそ、傷つけてしまうものかも知れません。

そして、傷つけられたなら、その傷はとても深刻で、まさに人格を傷つけるもの、尊厳を奪うものであり、大変な苦しみを負うことになります。

だからこそわたしたちには、常に神さまの助けが、神さまの赦しが、神さまの癒しが、切に必要なのです。

ヨハネによる福音書8章には、姦淫の罪を犯した女が、イエスさまの前に引っ張って来られる場面があります。通常は、石打ちの刑で殺されます。

しかしイエスさまは、人々に「あなたたちの中で罪を犯したことはない者が、まず、この女に石を投げなさい」と言われました。すると人々は、皆、去って行ったのです。

そして、イエスさまは言われました。「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない」。

イエスさまは、姦淫の女を赦されました。しかし、これは、女の罪がなかったことにされたわけではありません。姦淫は、隣人に対する罪、そして神さまに対する罪であり、確かに死刑に値する罪だったのです。

この女が赦されたのは、彼女の罪と、受けるべき死を、このイエスさまご自身が引き受けてくださるからです。そのためにイエスさまは、十字架の道を歩いていかれたのです。イエスさまがご自分の十字架の死で、ご自分の命で、この女の罪を償ってくださるのです。

だから、イエスさまは、女の罪を赦すことがお出来になるし、帰らせてくださるのです。

「わたしはあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない。」

わたしたちもまた、この御言葉を語りかけられています。わたしたちは、いつでも、この御言葉に立ち返ることができます。

わたしたちもまた、この女と同じように、イエスさまに罪を赦されて、その十字架に担われて、歩み出すことが赦されているのです。

わたしたちは、この主なるイエスさまの十字架のもとで、赦されて、悔い改めて、もう罪を犯さないことを、祈り求めつつ、歩むことしか出来ません。しかしまさに、そのようにして、歩いていくことが、ゆるされているのです。

この、わたしの罪を贖ってくださる十字架のイエスさまが、わたしの主であること。わたしたちの主であること。生活の主であり、人生の主であり、隣人の主であり、結婚の主であり、家庭の主であり、社会の主であり、この地上のすべての主であること。

ここに、この方に、わたしたちが罪を赦されつつ、祝福をいただいて歩いていくことができる、唯一の道が、備えられているのです。

わたしたちは、この第七戒で、自分の罪、自己中心的な歩み、神さまの御心に従えない自分、汚れた心の思い、最も近い隣人との破れを、見つめざるを得ないでしょう。

ですから、この第七戒の「姦淫してはならない」は、決して結婚している者たちだけの戒めではないし、ただ男女の関係や、不倫のことを戒めるためのものでもありません。

第七戒は、すべての者に悔い改めを求める戒めであり、また、すべての者に与えられている祝福への道なのです。

<わたしたちは聖霊の宮>

神さまが、わたしたちの主である。わたしたちは、主のものである。ここに、わたしたちの赦しと、慰めがあります。罪人であるわたしたちが、神さまの祝福を受けて生きることができる、根拠があります。

今日のコリントの信徒への手紙一 6：19～20 にはこうありました。

「知らないのですか。あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿であり、あなたがたはもはや自分自身のものではないのです。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。だから、自分の体で神の栄光を現しなさい。」

イエスさまの十字架によって罪から救われたわたしたちは、もはや、罪のものではないし、自分自身のものでもありません。わたしたちは、神さまのものとされたのです。

それまでは、神さまから離れ、罪にすっかり捕らえられ、どうしようもない弱さに、欠けに、惨めさに陥っていたわたしたちです。人を傷つけ、また傷つけられ、神さまに背き、逆らい、隣人との関係も壊して生きることしかできなかった、わたしたちです。

でも、そのようなわたしたちを憐れんでくださった神さまが、このわたしの罪深い体も、心も、魂も、すべてを買い取って下さったのです。

「あなたがたは、代価を払って買い取られたのです」とあります。その代価とは、神の御子イエスさまの命でした。

そこまでして、神さまは、わたしたちご自分のものとされたのです。

神さまは、そのような、とんでもなく高い代価を払ってでも買い取ってくださるほどに、わたしたちを、かけがえのない存在として、愛してくださっているのです。

だから、わたしたちは、もはや自分自身のものではありません。神さまのものです。

神さまが、イエスさまの十字架という大きな犠牲を払って、このわたしを、買い取ってくださった。罪から解放し、ご自分のものとして下さった。

そのゆえに、神さまは、わたしたちに聖霊、神さまの霊を与えて下さり、この聖霊によって、わたしたちと、十字架の死から復活なされたイエスさまとを結び合わせて下さいました。

そうしてわたしたちは、イエスさまの十字架の死を、わたしの罪の贖いの死として受け取り、イエスさまの復活の命を、神さまと共に生きる、わたしの新しい命として、受け取ったのです。そうしてわたしたちは、この体も、心も、魂も、生活も、人生も、命も、すべてイエスさまと一体とされたのです。

だから、ハイデルベルク信仰問答の問 109 はこのように教えます。

問 109 神はこの戒めで、姦淫とそのような汚らわしいこと以外は禁じておられないのですか。

答 わたしたちの体と魂とは共に聖霊の宮です。ですから、この方はわたしたちがそれら二つを、清く聖なるものとして保つことを望んでおられます。それゆえ、あらゆるみだらな行い、態度、言葉、重い、欲望、またおよそ人をそれらに誘うおそれのある事柄を禁じておられるのです。

「わたしたちの体と魂とは共に聖霊の宮です。」そうです、わたしたちは、神さまの聖霊を注がれた、恵みの器であり、また、罪と死に打ち勝ち、すべてを愛によって支配しておられる、神の御子イエスさまの体と一体なのです。

ですから、わたしたちは、この体を、汚らわしいことから遠ざけるというだけでなく、むしろ、この体に満たされている神さまの恵みを、神さまの愛を、神さまの栄光を、この世で現わしていくために、この体を用いるようにと召されているのです。

わたしたちが神さまのものである、イエスさまと一体である、聖霊の宮である。これは、何かの思想だとか、心の在り様とか、考え方とか、哲学とかではありません。

今ここに、この体をもって、命を生き、生活し、誰かと関わり、人生を歩んでいる、このわたしの存在の、現実の状態のことを言い表しているのです。

イエスさまに結ばれ、聖霊を注がれた、わたしたち一人一人に、神さまに愛されているものとしての、神さまに生かされているものとしての、神さまのものとしての、祝福された歩みが備えられています。

その祝福を、自ら投げ捨てることがないように。どうかわたしたちが、自分でも、神さまのものとして愛されている自分を愛し、また神さまのものである隣人を愛し、イエスさまにあって、共に、互いに、誠実に生きていくことが出来ますようにと祈り願います。

【お祈り】

天の父なる神さま

あなたの御前にありながら、共に誠実に歩むことのできない、欠けのある、罪深いわたしたちをお赦してください。

わたしたちの間に、いつも主の贖いの十字架がありますから、その赦しの許で、愛の許で、赦されつつ、痛む傷を癒されつつ、御心に適った、愛の共同体を築いていくことが出来るように導いて下さい。

わたしたちは今、まず教会という、主に結ばれた共同体、神の愛の家族の中に、生かされています。その祝福を喜び、感謝し、あなたの御名を崇めて、共に歩いていけますように。

その恵みにあって、あなたがそれぞれ与えて下さった、夫婦の関係を、祝し、守ってください。また、家族の関係を、隣人との関係を、わたしたちのあらゆる関係を、神さまの御手の中に置いてください。

また、一人一人が、イエスさまの貴い命によって買い取られ、あなたのものとされ、聖霊が住んでくださる宮とされていること、イエスさまと一つに結ばれていることを覚えさせてください。だからこそ、わたしたちが、イエスさまの心を、自分自身の心とし、自分自身の体を、イエスさまの体として、清い、大切な、貴いものとして扱い、あなたに喜ばれるものとして用いていくことが出来ますように。

このお祈りを、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン

【讃美歌】 521 「とらえたまえ、われらを」

【信仰告白】 ニカイア信条

【十戒】

【献金】 65-1 「今そなえる」

【主の祈り】

【祈祷】

【讃美歌】 29 「天のみ民も」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、
あなたがた一同と共にあるように。アーメン